実行団体 事後評価報告書	学生団体　加子母木匠塾　　活動地域	岐阜県中津川市加子母地域 岐阜県下呂市馬瀬地域

若者の木造建築学習を通じた山村再生事業

E-mail　kashimo.mokusho@gmail.com
URL　https://www.kashimokusho.com/

資金分配団体名	一般財団法人 中部圏地域創造ファンド	事業の種類	草の根支援事業 2019
資金分配団体事業名	NPO による協働・連携構築事業	実施期間	2020 年 4 月～2023 年 3 月

1 事業概要

社会課題	日本の建築は、林業を営む山間地域と密接に関わりながら太古の時代より技術と伝統を受け継ぎ発展させてきました。しかし、近年、我が国の人口減少は農山村に最も顕著となっており、過疎化・高齢化によって、林業従事者の減少によって森林の管理が行き届かず荒廃が懸念されるなど、森林・林業、木材産業は大きな問題に直面し、農林業の衰退によって山村の維持は深刻となっている。
事業概要 対象者	京都大学、京都工芸繊維大学、京都芸術大学、立命館大学、滋賀県立大学、金沢工業大学、名城大学、東洋大学及び OB 約 400 名
中長期 目標	・現役学生及び OB による団体として加子母木匠塾の組織化を図り、自然、森林、木材、山村社会と都市との交流、森林生態系や環境問題について活動する。 ・木造建築技術について実習体験を行うとともに、森林、木材の活用や自然体験、木造建築物の建造実習を行う。
活動方針	我が国の大学において、木造建築を学ぶ機会は少なく、特に、現場実習体験することは極めて少ない。加子母木匠塾は、林業地において、都市部の大学を中心とした学生たちが滞在しながら、木造建築技術の継承はもとより、都市と農村、若者と高齢者の交流システム、コミュニティーを発展させることを目的とする。

学生たちが改修してきた古民家「松屋」

2022 加子母木匠塾製作　ベンチ

3 年 間 の 活 動 の 成 果		
1	社会人となっても、地域と係わり続けている若者	152 人
2	建築系以外の学生と連携により、視野と経験が深まったという若者	110 人
3	ＯＢとの連携により、新たなビジネスや地域との関係が展開された数	2 件
4	若者たちの受け入れによって、地域に生まれた新たなコミュニティ	1 件
5	参加者間で取り組んだ森林整備や間伐材利用量	5 立米

2 事後計画の記載内容

2－1 主な活動とアウトプット

※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

活動 1

・地域資源調査や木造建築実習等によるフィールドワークの機会を創出し、実社会で必要なマナーや協調性を養う。
・地域住民との交流や研修を通じて、山村地域の抱える問題の解決に向けた意識を向上させる。

アウトプット	社会人としての必要なスキルアップと過疎地域の活性化に取り組む状況が生まれる。		
指標　1	①研修会の実施回数　②研修会の参加者数　③カリキュラムの作成		
	初期値	目標値	実績
	①年間 1 回　②70 人　③なし	①　年間 5 回　②200 人　③あり	年間 9 回　②322 人　③あり

活動 2

・過去 25 年間で木匠塾活動に参加した OB への働きかけを行う。
・名古屋、京都、東京など OB が多く生活している圏域での説明会、交流会を実施する

アウトプット	事業を継続、発展させていくために OB 会組織を強化する。		
指標　2	①OB 会への登録者数　　②OB 会活動参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①0 人 ②年間延 200 人	①500 人 ②年間延べ 300 人	①　182 人 ②年間延べ 84 人

活動 3

・農林業の労働体験や遊休農地を活用した米づくりの実践を行う。
・集落の伝統行事への参加や地域行事への人的サポートを行う。

アウトプット	集落の機能維持活動や地域行事に学生、OB が継続的に参加する。		
指標　3	①集落の機能維持活動への学生及び OB の参加者数 ②地域行事への学生及び OB の参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①0 人 ②年間延べ 300 人	①30 人 ②年間延べ 500 人	①　6 人 ②年間延べ 65 人

活動 4

・他分野の学生とも連携し、地域課題に取り組む調査やプログラムの検討を行う。
・調査等を踏まえ、新たな視点での地域活性化に向けたプランを検討、提案する。

アウトプット	学生や OB が主体となり地域の将来について考え、地域への提案などを行う。		
指標　4	①アンケート調査実施回数 ②学生及び OB から地域への提案プラン件数		
	初期値	目標値	実績
	①1 回　②0 件	①　1 回　②3 件	①1 回　②3 件

活動 5

・地域要望に応じた資源活用の提案や木造の製作物を建築実習を行う。
・木造建築の技法のみでなく 森林整備から国産材利用の重要性を学ぶカリキュラムを構築する。

アウトプット	木造建築実習を通じて、国産材利用の重要性を学びながら、地域施設を整備する。		
指標　5	地域要望に基づいた整備箇所数		
	初期値	目標値	実績
	年間 7～8 件程度	年間 10 件程度	年間 8 件程度

2－2　3 年間のインプット

	計画値		実績値	
資金	事業費　（自己資金含む）		事業費　（自己資金含む）	
	直接事業費 管理的経費	5,350,000 円 0 円	直接事業費 管理的経費	5,350,000 円 0 円
	評価関連経費	222,000 円	評価関連経費	222,000 円
人材	内部：合計 300 人 （8 大学の代表で組織する幹事会 25 人） 外部：合計 50 人 （地元の林業・建築関連団体で組織する実行委員会）		内部：合計 402 人 （8 大学の代表で組織する幹事会 25 人） 外部：合計 50 人 （地元の林業・建築関連団体で組織する実行委員会）	
資機材・その他				

1）資金インプットの特徴、インプットに対する成果の規模や質等の妥当性・効率性

人件費：プロジェクト推進のための事務局員
報償費：設計アイデアコンペに係る審査員謝金
旅費交通費／使用料及び賃借料：交通費及びレンタカー使用料
需用費：拠点施設修繕費他

2）自己資金の種類、資金調達で工夫した点

活動参加者より会費及び参加費を徴収し自己資金に充当している。全員が大学生であるため、まとまった費用を調達することが困難である。

3）人材インプットの役割分担等

賃金は、コロナ感染防止のため現役学生が現地への往来ができないため、臨時職員を雇用し業務を行わせた。

3　事後評価の方針

3-1　評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野
内部	原田佳苗	丸昇彦坂建設株	全般
内部	山本明斗	立命館大学	全般

3-2　事後評価のポイント

1	参加した学生が社会人となっても、地域と係わり続けている関係性を築くことができたか。
2	建築系以外の学生と連携により、参加した学生は視野と経験が深まることができたか。
3	ＯＢとの連携により、新たなビジネスや地域との関係性を築くことができたか。
4	若者たちの受け入れによって、地域に新たなコミュニティを生み出すことができたか。
5	事業によって、参加者に森林整備や国産材利用の重要性の認識が高めることができたか。

4　事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

※アウトカムの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

4-1　参加した学生が社会人となっても、地域と係わり続けている関係性を築くことができたか

成果 1	社会人となっても、地域と係わり続けている若者		
アウトカム指標　1	①OB 会加入者数 ②業務、行事参加、観光等への OB 再訪者数 ③地域移住者		
	初期値	目標	実績
	①0 人：未結成 ②　調査できていない ③　0	①　500 人 ②　200 人 ③　5 名	①　152 人 ②　28 人 ③　1 名
評価方法	・加子母木匠塾ホームページからの OB 会加入者数 ・中津川市研修交流施設ふれあいのやかたかしも及び拠点施設松屋の利用状況 ・移住者については市役所調査		

1）確認できた事実・成果

2020 年 7 月に加子母木匠塾同窓会（OB 会）を設立し、加入者数は現時点で 152 名である。その内、木匠塾史の作成に関わるなどコアな活動に関わる人数は 26 名である。コロナ禍により直接訪問する OB の人数は限られるが、木匠塾史編纂プロジェクトや現役大学生向けのサポート、また地域特産品オンラインショップの顧客として、地域との関りを保ち続けている。また、OB の映像カメラマン 1 名が、住民票は実家から移してはいないが、生活拠点を加子母地域に移し、仕事の傍ら木匠塾の事務補助を行っている。

コロナ前　2019 年の幹事会

コロナ後　2022 年の幹事会

2）成果（課題）が生まれた要因

同窓会（OB 会）加入率は低いものの、現在加入しているメンバーは現役時代からリーダー的な存在で、加子母地域や加子母木匠塾に対して熱い思いを持っているメンバーが多い。以前は、夏の合宿中に OB が激励に訪れることが慣例になっていたが、コロナ禍であるため控えている状況である。

3）気づきと今後に向けて

現在 2024 年の木匠塾 30 周年に向け、木匠塾 OB でもあり現在京都大学建築学科の柳沢究准教授ら

が中心となり、「加子母木匠塾とは何なのか―30 年続く木と建築の学び場（仮）」の発刊に向け準備が進んでいる。設立に向け尽力された当時の大学教授や地元の林業・建築関係者、そして活動に参加した各世代の学生たちの思いをまとめる内容になっている。この塾史が発行されるのが加子母木匠塾と地域を再びつなぎ合わせる機会になると期待している。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

ここ数年は木匠塾の合宿もできなかったため、OB の方々から事務局を通じ、職場訪問やインターンの募集、有名建築家の作品展へのお誘い、または模型作りのアルバイトの募集などをいただく機会も増えてきている。

4 -2 建築系以外の学生と連携により、参加した学生は視野と経験が深まることができたか。

成果 2	建築系以外の学生と連携により、視野と経験が深まったという若者		
アウトカム指標　2	①大学間の連携によるプログラム数 ②プログラムへの参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①0：建築実習に限られている ②0	①　3 事業　②200 人	①　4 事業　② 110 人
評価方法	・建築系以外の学生との連携を経験した学生へのヒアリング ・事務局への聞き取り調査		

1)確認できた事実・成果

（一社）aichikara が実施する至学館大学を対象にした山村スタディツアー、学校林での環境教育に取り組む名古屋工業大学との連携、地域づくり活動に取り組む龍谷大学大岩街道周辺地域の環境保全活動、名古屋大学産官学連携推進本部との連携など、コロナ禍ではあるが、木匠塾活動を基軸にして新しい連携も生まれている。

名古屋工業大学モルック

2）成果（課題）が生まれた要因

今年になり新型コロナウィルスが落ち着きを見せ、加子母木匠塾に参加する学生も限られた時間や条件下で活動を模索していたため、ゆるいコラボではあるが他大学のプログラムに加わるケースが見受けられるようになった。

3）気づきと今後に向けて

加子母木匠塾については、人数も限られ制作課題の規模も小さくなったことから、少し余裕が出てきたメンバーは他大学との協働に限らず、地域の広く関心をもつ学生が増えてきているように思われる。

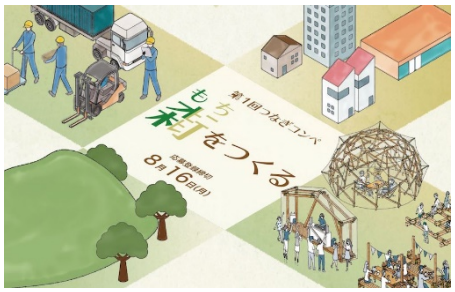
4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

加子母木匠塾も以前は、かなり労力を必要とする制作課題に追われているイメージが強かったは、少し余裕が出てきたのか地域の事に広く関心をもつ学生が増えてきているように思われる。

4-3　ＯＢとの連携により、新たなビジネスや地域との関係性を築くことができたか。

成果３	ＯＢとの連携により、新たなビジネスや地域との関係が展開された数		
アウトカム指標　3	①取り組みによって解決、進展した地域課題数 ②地域資源を活用した新規ビジネス事業数 ③連携事業や地域イベント等への OB の参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①　0　②0　③0	①　2 事業 ②　3 事業：OB が行う事業も含める ③　200 人	①　0 事業 ②　2 事業：OB が行う事業も含める ③約 1200 人
評価方法	・OB との連携により実施されたイベント（ビジネス）数の実地確認		

1）確認できた事実・成果



2021 年 7 月には木匠塾京都大学 OB で、建築学生のためのポータルサービス「BEAVER」を展開している伊藤拓也氏より、建築学生向けコンペ「第 1 回つなぎコンペ-もちをつくる」へのアプローチがあった。このコンペの目的は、森林資源の循環や国産木材の適切な利用で、前年度「渡合コンペ」で学んだ実績を活かす機会として提案があり、木匠塾生向けに説明会も開催しながら OB として木匠塾活動の意義を伝えてくれた。

2022 年 7 月には、同じく木匠塾京都大学 OB の堀氏、河野氏からの働きかけで、東京大学が主催する建築生産マネジメント寄付講座連続レクチャー「つくるとは、」が、かしも明治座からオンライン配信で催行された。これは、加子母木匠塾 OB とアメリカ・ユタ州で建築実習を行う日本人女性との対談で、「つくる×教育」をテーマに、コロナ禍で苦闘する木匠塾生や建築学生に向けて、視野を広げるようにとのメッセージであった。

2）成果（課題）が生まれた要因

この二つの働きかけは、自らが加子母木匠塾に参加し、森林や自然、生業に触れながら学んだ経験が今の生き方や仕事につながっていること、また大学で建築を学ぶ上でこの「木匠塾」というものが貴重な体験であるということを現役生たちに伝えたいとの思いであった。

3）気づきと今後に向けて

このように OB との連携によって、地域の森林資源に向き合いながら、国産材の有効活用や新たな木材利用の方法などを模索していく気づきを学生たちに与えてくれた。学生たちにとってはいきなりビジネス展開していくことは難しいことではあるが、今後国産材利用の可能性を広げていくことの重要性をお互い再認識することができた。

京都市内で行った OB との交流会

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

「第１回つなぎコンペ」には、木匠塾参加者でチームをつくりエントリーしたが残念ながら入賞には至らなかったが、あらためて国産材利用の有効性や、またコンペでの伝え方の手法などを学ぶよい機会であった。また、「つくるとは、」レクチャー後には、海外留学などで視野を広げたい学生もおり、具体的にユタ大学での建築プログラムについて相談をしている学生もいて、今後ユタ大学と加子母木匠塾が結ばれるのも近いかもしれない。

4-4 若者たちの受け入れによって、地域に新たなコミュニティを生み出すことができたか。

成果４	若者たちの受け入れによって、地域に生まれた新たなコミュニティ		
アウトカム指標　4	①　取り組みによって生まれた新たなコミュニティの数 ②　取り組みに関わる関係人口		
	初期値	目標値	実績
	①0　団体 ③　0 人	①　2 団体 ④　500 人	①　1 団体 ②　30 人
評価方法	・若者たちを受け入れた新たなコミュニティに対する直接観察		

1)確認できた事実・成果

現地での活動が制限され、数量的に目標を達成することは困難であったが、総幹事が拠点施設である松屋に長期的に滞在しながら地域住民とのつながりを広げた。４月には農業用水路の清掃作業や、７月～8 月にかけては、馬瀬地区で展開した馬瀬川プロデュースや aichikara の活動と協働し遊休農地などの草刈り作業なども行った。

2022 年 11 月に行われた加子母歌舞伎講演会には、加子母木匠塾 2022 総幹事の山本君と京都芸術大学の鈴鹿さんが役者として出演することになり、夏休み終了後も滋賀県から稽古に通い、当日は見事に大役を演じた。舞台となるかしも明治座は NPO 法人かしもむらが管理運営しており、昨年から滞在しながら活動をしていた山本君も頻繁に訪れて、施設案内やイベントの手伝いを行っていた。今年もコロナ禍により多くの地域行事や祭りなどが中止になっており、加子母歌舞伎についても、その開催が危ぶまれていたが、11 月に開催時期をずらし実行することが決定され、新しい風を吹き込む意味でも木匠塾生が役者として抜擢されることになった。長く続いてきた木匠塾といえども、外部からの往来となるので感染防止の点からも活動に対してきびしい目を向けられていたが、日頃の体調管理や感染防止を徹底し活動を行っている姿勢が評価され、地域にとっても地域コミュニティの一員であると認められた結果でもあった。

2）成果（課題）が生まれた要因

8 月に実施した合宿も、3 か所に分かれて分散宿泊し、期間も 1 週間交代制で行い、滞在中は感染防止策を徹底して実施し、160 名もの参加者からは感染者を 1 名も出さなかったことも信頼につながった。上記のとおり、規模縮小したため数量的に目標を達成することは困難であったが、リーダー役が地域に長期的に滞在しながら地域住民とのつながりを広げ信頼関係を築いたことが地域に認められた一番の要因であり、8 月の木匠塾合宿を感染者ゼロでやり切ったことが、3 年ぶりの歌舞伎公演実施につながったとも言える。

3）気づきと今後に向けて

地域に生まれた新しい関係性は、この他にも 4 月には農業用水路の清掃作業や、7 月～8 月にかけては、馬瀬地区で展開した馬瀬川プロデュースや（一社）aichikara の活動と協働し、遊休農地などの草刈り作業なども行い地域住民との信頼関係を構築できたことが大きい。コロナ禍により、山間地域の伝統的な祭りなどのコミュニティも崩れかけていると言われている。来年度も、まずは地道な活動から地域に少しでも溶け込み、そこに伝わる文化や思いを理解することが私たち学生の果たす役割であると感じる。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

木匠塾の合宿が終わってから、2 か月間歌舞伎の稽古を行った。とても貴重な体験をロナ禍により今年も多くの行事や祭りが中止になり、地域の伝統的なコミュニティを守っていくことの大切さを実感できた。これからも引き続いて地域に溶け込みながらコミュニティを築いていきたい。

〈以下、参加者のアンケート〉

松本団女師匠にやってみる？と言われたその日に稽古が始まり、気づけば公演日になっていました。演者、裏方関係なく、地域の方々が本番までずっと楽しんでいたのが印象に残っています。舞台から見るかしも明治座は普段より立派な芝居小屋に見え、昔から変わらないであろうその熱気と景色は今でも鮮明に覚えています。県外の学生である私達を優しく受け入れて下さった地域の方々に本当に感謝しています。この地歌舞伎を機にさらに加子母が好きになりました。（鈴鹿裕子）

4-5 事業によって、参加者に森林整備や国産材利用の重要性の認識が高めることができたか

成果 5	参加者間で取り組んだ森林整備や間伐材利用量		
アウトカム指標 5	① 取り組みによって増加した地域材利用量 ② 森林整備面積 ③森林学習参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①約 2 立米 ②0.0ha ③ カリキュラム履修者:20 人	① 10 立米 ②1ha ② 200 人	① 5 立米 ②0.15ha ② 60 人
評価方法	森林整備・木材搬出状況の実地確認		

1）確認できた事実・成果

加子母木匠塾で整備を行ってきた学校林「かしも学びの森」の継続的な活用に向けを名古屋工業大学が取り組んでいる。今年は、その学校林内で間伐が行われたので、加子母小学校 4 年生の森林学習の一環で、間伐材を用いたモルックづくりを通じて森林教室を行った。

加子母木匠塾の活動としては、上記の学校林内に間伐して木材市場へ搬出されず放置されている材木の先端部分や枝葉などの片づけと搬出作業を行った。枝葉も通常はこのまま腐らせてしまうことが多いのだが、板にしたときに抜けてしまう「死節」を埋めるための節として専門業者に出荷する材料を集めたり、合宿時の宿泊施設で使用する薪ボイラーの燃料として、残材を林内から搬出する作業を行った。

2）成果（課題）が生まれた要因

木匠塾の活動でも、普段は加工された角材や板からスタートするため、実際に森林に入って原木に触れる機会がなかったため、指導してくださった地元の林業グループの方に、ヒノキやスギの見分け方などから間伐の重要性などを学ぶことができた。この学校林内の活動については、名古屋工業大学の学生たちが加子母小学校と連携し小学校 4 年生を対象にした森林教室に継続的に取り組んでおり、森林環境や国土の保全、間伐材の有効利用など、建築を志す我々もあらためてその重要性を再認識する機会となった。

3）気づきと今後に向けて

今回のフィールドとなった学校林は、10 年ほど前に加子母木匠塾としても学校から侵入する橋や林内のベンチ、デッキなどを製作した場所でもあった。ただ、造りっぱなしになっていて、当時の製作物は腐食して撤去したものもあった。モノを造るだけの建築で終わることなく、しっかりとそこで継続されていくコトを実践していくことの重要性を感じた。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

今回この作業に参加できたのは加子母木匠塾の中でも、東洋大学だけであったが以下のような感想が共有された。

・まだまだ利用できそうな原木が放置されていたが、やはり市場に出しても市場価値ない材は、搬出コストの方が高くついてしまうためが林内に放置されてしまう。

・自ら運び出せば、燃料としても、もちろん建築の材料として使える。

・製材された角材ではなく、丸太のままで製作してみたり、捨てられている枝葉や製材所で剥かれた木の皮などを用いて製作にチャレンジしてみたい。

・林内での作業を行うにはしっかりした安全装備をしていないと危険である

・建築に関わるものとして森林整備や国産材の利用の重要性をぜひ学びたい

・来年度から、加子母木匠塾として森づくりに取り組む計画で、現在中津川市役所に相談しているが、やはり今回の名古屋工業大学の取組みのように、単なる物づくりだけでなく林業に対する地域の思いを理解して、地域に根差した活動が大切であると感じた。

5 特筆すべき成果
～予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等～

・旅と学びの協議会に参加することによって、リーダー層の意識が高まった。

・aichikara との連携によって実施されたリーダーシップに関わる研修への参加が有意義だった。

6．協働・連携による課題解決の体制の充実

6-1　チーム内の協働・連携

1）チーム内で協力した内容

C0：かしもむら、　C１：馬瀬川プロデュース　C2：aichikara

（1）分散型木造建築実習事業				
協力活動の項目	C0	C1	C2	協力した内容
広報	○	○	○	SNS を用いた広報活動
内容的な連携	○	○	○	馬瀬の水辺の館との意向調整
作業面の手伝い	○	○	○	作業場所の確保、安全管理等
その他				

協力による効果

・2021 年度は農村景観の維持に向けた水車（2021）を全大学で共同製作し、滞在拠点として整備してきた松屋に設置した。水車制作にあたっては地元の水車職人さんから指導を受け、ノウハウをテキスト化することができた。

・2022 年度は、アフターコロナー向け集い場の創出に向け、オリジナルデザインのベンチ（８案）を共同制作した。秋にはお披露目を兼ねて、加子母軽トラ朝市にて焼き芋販売も行った。

・2021-2022 にかけて滋賀県立大学チームが馬瀬地域の観光施設「水辺の館」のカウンターで試作を行っ

た。

（2）ONLINE によるアイデアコンペ事業				
協力活動の項目	C0	C1	C2	協力した内容
広報	○	○	○	SNS を用いた広報活動
内容的な連携	○	○	○	馬瀬の水辺の館との意向調整
作業面の手伝い	○	○	○	作業場所の確保、安全管理等
その他				

協力による効果

・2020 年度は、コロナ禍により現地へ往来が一切できなかったため、以前から地域で課題となっていた渡合エリアの資源活用に向けたアイデアコンペをオンライン形式で実施した。

・行動が制限される大学生に代わり、OB が現地の測量や空撮やイメージ映像を撮影し素材を提供のサポートを行ったり、講評についても OB の大学教授が行うなど連携が進んだ。

・自由な発想による渡合エリアの活用案のイメージが共有されたことにより、地域の関心も高まり加子母総合事務所を通じ、所管する東濃森林管理署への提案も行った。

2）自団体の貢献と体制整備

(1) 自団体がチーム対して行った協力内容、その効果と評価

本プロジェクトにおいても、加子母木匠塾はマンパワー的にも大きく、活動エリアに下呂市馬瀬地区も加わり意欲的であったが、事業前半は現地に赴くこともできなかったのが残念であった。その中でも、初年度のアイデアコンペなど OB の協力が得られ、加子母木匠塾としてのネットワークが拡大する効果につながった。

（2）自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての変化・成果と評価

また、30 周年を控え加子母木匠塾史編纂委員会が立ち上がった影響も大きく、毎月の編集会議の開催し加子母関係者のインタビューや市長への取材などが積極的に行っており、まさに知見の集大成が出来上がりつつある。

6-2　支援対象者・参加者の参加促進、関係の形成

1）支援対象者・参加者の増加・広がりの実績、成果につながった工夫・協力等

これまでは加子母木匠塾の活動は、加子母地域に限定した木造建築実習が主な活動であったが、本事業を通じ下呂市馬瀬エリアがフィールドに加わり、なおかつ（一社）aichikara など他分野での活動との接点ができたことによって、過疎化が深刻な山間地域の課題などを共有することができた。コロナ禍での活動で現地での滞在は制限されることが多かったが、地域との関係性は学生時代の一過性のものとして終わるのではなく、OB、社会人となっても関わり続けていける仕組みを構築したいと考えている。

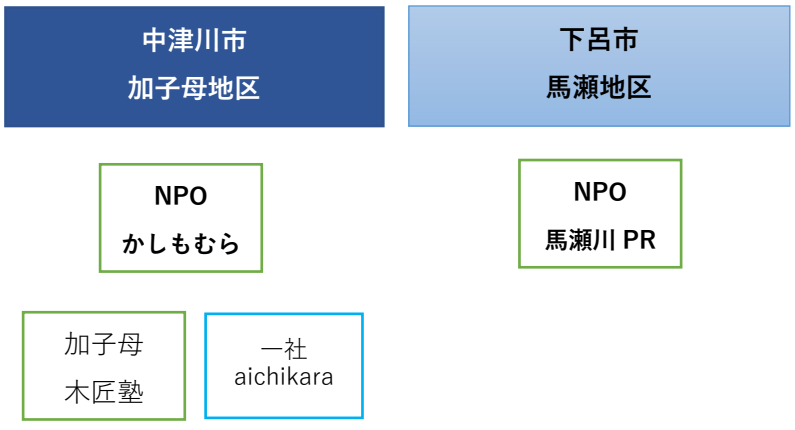
2）支援対象者・参加者の変化、変化が生まれた要因・工夫

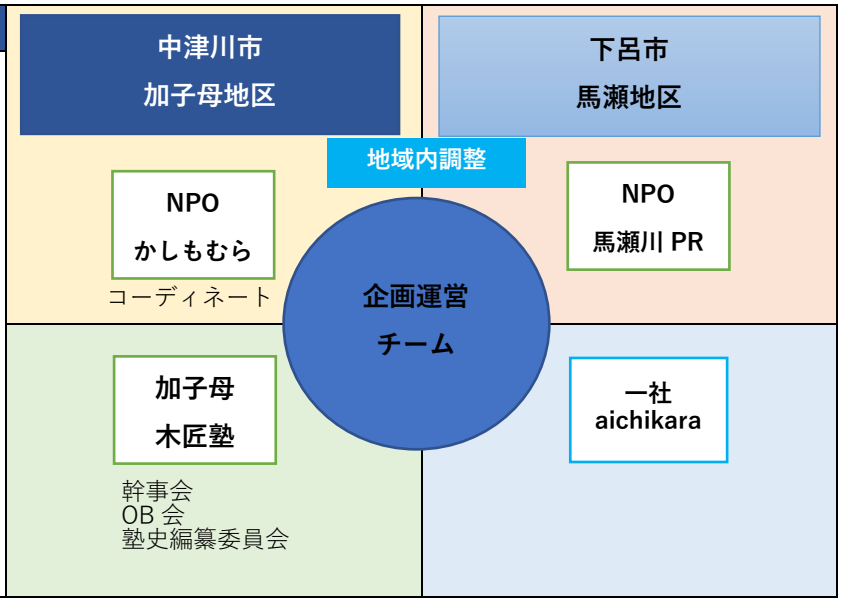
現役学生は、8 大学の代表者による幹事会と各大学に生活、広報、イベント、設計、会計の係を設け、それぞれ役割分担しながら運営を行った。現地へ赴ける機会は少なかったため、ほとんどがオンラインでのミーティングを重ねながらの運営準備であったが、夏に現地で実現したリアルな対面と活動は感動的でもあった。その他、新たに活動エリアとして広がった馬瀬地区とのオンラインセミナー、OB とのオンラインセミナー、複数の大学が所在する京都市内での OB を交えての対面での意見交換会など工夫を凝らしながら、コロナ禍の中での活動を組み立てていった。

6-3　課題解決に取り組む協力関係の変化

この事業を通じて、新たに NPO 馬瀬川プロデュースや一般社団法人 aichikara との連携関係が構築することができたのが、これまでの加子母木匠塾の枠を超え、コロナ禍のなかで地域の方々と活動の在り方を模索できたことが多くの学びにつながった。また、この名古屋工業大学、日本福祉大学、志學館大学、富山大学、名古屋大学などと、大学や分野の枠組みを超えて、地域のあり方や課題解決に向けて協力し合える関係が構築できた。

1）協力関係構築の実績

本事業前の関係	
支援対象地域は、中津川市加子母地区と下呂市馬瀬地区でどちらも人口減少が著しい過疎地域である。NPO かしもむらと NPO 馬瀬川プロデュースは、それぞれの自治体内で活動していたが、加子母地域内で域学連携活動を展開していた、加子母木匠塾と一社 aichikara と連携することによって、学びの場の拡大と地域の新たなサポーターとしての関係性の構築を図った。	

事業を通してできた関係	
NPO かしもむらがコーディネートしながら、自治体が異なる両地域をフィールドに地域課題の解決に向けて取り組んだ。 若者たちの受入れ、活動フィールドの提供等の調整は、それぞれ地元の NPO が窓口となって調整しているが、それぞれの団体の持つスキルを活かせるようフラットな関係のチーム編成に取り組んだ。	

事業を通してできた関係			
若者（学生）たちの受入れ、派遣に対して理解が得られた。	1	至学館大学	学生募集、派遣
	2	南飛騨馬瀬川観光協会	フィールド提供
	3	加子母観光協会	フィールド提供
	4	認定農業者団体	農業体験受けれ
	5	加子母木匠 OB 会	活動支援、塾史編纂
	6	地元ライタークラブ	SNS 情報発信

2）協力関係を構築する上で行った工夫、評価

加子母木匠塾の活動は 25 年以上となるが、これまで設立しておらず、30 周年を迎えるにあたり会員の募集を行った。同時に、OB たちを中心に「加子母木匠塾 30 周年史」編纂の動きが活発化し、大学教授を中心に編纂作業が進められている。

8．資料等

1.加子母木匠塾 2022(中津川市域学連携事業成果報告会発表資料)
2.加子母木匠塾の歩み（「ともにつくる、」発表資料
3.新聞掲載記事まとめ